

藤女子大学紀要, 第 49 号, 第 II 部: 121-135, 平成 24 年.
Bull. Fuji Women's University, No. 49, Ser. II: 121-135. 2012.

性的虐待を受けた子どもと非加害親への心理的支援

— 児童家庭支援センターでの親子並行面接を通して —

小山 充道 小野 実佐 今泉 明子

Abstract

This is a case study of a sexually abused child and her mother (non-perpetrator parent) who underwent parallel interviews conducted by therapists in a child and family support center.

The child was in the first grade of an elementary school and had been sexually abused by her father. One therapist carried out play therapy for the child once a week. The treatment target was to overcome her trauma. A second therapist interviewed her mother with the aim of psychological recovery and support that would allow the mother to take a role in the daily care of her child. In this paper we discuss the psychological transformation and recovery process as well as the ideal method of psychological support in cases of sexual abuse, such as the case of the mother and child described above. The stages of the psychological transformation process through which the child passed during the play therapy were as follows: reproduction of the abuse and her self-image as a survivor, the image of a safe place to stay and the expression of her feelings, and, finally, the care of her mind and body and the recovery of self-image. On the other hand, the stages her mother passed through included acceptance of the fact of sexual abuse fact, understanding of the damage received by the child and psychological care, and, finally, an understanding of the damage done to the mother. As a result of support provided for both the mother and child, they were able to recover psychologically and their domestic relations were reestablished.

キーワード：性的虐待、母子支援、描画療法、親子並行面接、子ども虐待、心的外傷(トラウマ)、2人セラピスト

I はじめに

児童虐待は年々、増加の一途をたどっている。平成 21 年度の全国児童相談所の虐待相談対応件数は 4 万 4 千件を超え、虐待防止法施行以前の平成 11 年度と比較して約 3.8 倍の増加である。しかし、ここ数年の虐待種別の内訳を見ると、身体的虐待とネグレクトが約 40 パーセント、心理的虐待が約 20 パーセント、そして性的虐待が約 3 パーセントという比率に大きな変化はなく、性的虐待の相談受理件数がほかの 3 タイプと比較して非常に

少ない状況が続いている(子どもの虹; 2011)。その点について山本(2010)は、日本では保護者や親権者、監護責任者、里親が子どもに性的暴力を行った場合のみ性的虐待として扱われるという限定的な定義ゆえ、統計上の性的虐待件数が、実際に児童相談所が扱う子どもの家庭内性暴力被害件数から見るとかなり少なくなっていると述べている。また西澤(1994)は、性的虐待は身体的外傷を残さないことが多く、子ども自身も虐待の事実を秘密にしておこうとする傾向や共犯意識を持たされてしまうため、4つのタイプのうちで発見が

Mitsuto KOYAMA 藤女子大学人間生活学部保育学科
Misa ONO 興正こども家庭支援センター
Meiko IMAIZUMI 興正こども家庭支援センター

最も困難だとしている。さらに、山本(2010)、西澤(1994)をはじめ、さまざまな研究者が、性の問題を公にすることをためらう文化的な抑圧が、社会の中に存在することを指摘している。このような統計上の理由や発見と立証の困難さ、性問題をタブー視する文化・社会的態度から、実際に発覚している性的虐待はごく一部である可能性が高いと考えられる。なお、石川(2008)は子どもの性暴力被害の全体数は年間約2万件あると推定している。

被虐待児の特徴について奥山(1997)は、自己評価が低い、衝動的、攻撃的、他者の顔色を窺う面があることを指摘し、西澤(1994)は、被虐待児への心理的回復にとって、まずは安心・安全な場があることが最も必要だと述べている。とくに、性的虐待を受けた子どもは親密性や愛着にかかわる安全感や自己評価、対人関係能力の根幹に深刻な損傷を受けていると山本(2010)が述べているように、性的虐待を受けた子どもの回復にとっては、とくに心理的な安心、安全な場の確保が第一であり、その確保のためには非加害親の存在のあり方が重要だと思われる。

岡本(2009)は、性的虐待事例では非加害親を中心とした家族参画による家族支援が現実的で有効だとし、非加害親を中心とした家族が子どもを守れるような支援の在り方を深める必要があると考えている。このことから、加害者から離れ、子どもが回復の道のりを歩み始めた時、子どもへのプレイセラピーを含むトラウマへの治療的介入だけではなく、安心感・安全感を育んでいかねばならない非加害親への支援も当然必要だと考えられる。

虐待などのトラウマを受けた子どもたちへの心理療法的アプローチを、Gil(1991)は、修正的接近と回復的接近に分けて整理している。修正的接近とは日常的な生活の中で行われる環境療法であり、回復的接近とはトラウマの解消を目的にトラウマそのものに働きかける心理臨床的接近法である。Gil(1991)は、これら二つが統合して行なわれることが子どもの心理的回復に有効的に働くとしている。つまり日常での環境療法を担う非加害親と心理療法を担うセラピスト(以下、Thと略す)が連携して子どもの心理的回復を支えることが重要との指摘である。このことは、非加害親を子どもの日常的なケアをする人としてThが支え

ることが必要だということを示唆している。

本研究では、児童養護施設に附置されている児童家庭支援センター(以下、センターと略す)において、実父より性的虐待を受けた小学校1年生女兒と、非加害親である実母への親子並行面接を行なった事例を取り上げる。子どもに対しては週1回のプレイセラピーを実施し、その中でトラウマに対する心理臨床的アプローチを行った。それと同時に、実母に対しては別のThが面接を実施した。Thは、実母が子どもの日常をケアし、子どもの心理的回復をめざして日常を支える協力者となっていけるようになることを目指し、心理的援助を試みた。

本論文では、母子の心理的变化や心理的回復過程の分析を通して、性的虐待事例の支援のあり方を検討する。なお、プライバシー保護のために、事例については、その本質を変えない程度に適宜変更を加えた。

II 事例の概要

1 家族構成

実母(30歳代前半、非正規職員)、長女(小学校1年生。以下、クライアント(CI)と略す)

*実母からの聞き取りによると、実父は実母と同年代で、一流企業と呼ばれる会社に勤めていた。

2 実母の主訴

実父からの性的虐待を受けたCIについて、実母はThに『子どもへの接し方がわからない。また、子どもに対して心理的なケアを行ってほしい』と述べた。この2つの求めに応じ、Thは面接を開始した。

3 面接の構造

CIの担当セラピストは以下Thと記し、実母面接担当セラピストを以下親Thと記す。

面接経過を4期に分けて示す。CIの言葉を「」、Thの言葉を()、実母の言葉を『』、親Thの言葉をく)、箱庭のミニチュアやおもちゃを(〃)、補足部分を《 》とする。面接回数は(#～)と表記する。

面接実施期間は、X年7月～X+1年12月の約1年5か月間であった。概ね週に1回、約50分間の面接を計44回行なった。

4 面接までの経緯

X-1年7月、『実父がCIへ性的虐待をしている事実を本人(CI)から今日聞いた。相談できる機関を知りたい』と取り乱した様子の実母からセンターに電話が入った。CIが実母に話した虐待内容には、実父に風呂場で性器をいじられた、執拗に陰部を洗われる、下着に手を入れられるなどの性的虐待、熱い湯船に沈められ蓋を閉められる、熱いお湯を体かけられるなどの身体的虐待が挙げられた。その際対応したスタッフは、重篤な虐待だと察し児童相談所への相談を勧めたが、実母は『CIが児童相談所から事情を聞かれると可哀想だし、児童相談所は以前相談した時の印象が良くない』と消極的であり、『弁護士に相談する』と言い、電話を切った。

CIは虐待事実を告白後、拒食状態が1週間ほど続いたので、実母は別居を決意し、CIと共に母方実家に転居した。その後、実母は警察など様々な機関に相談したが、性的虐待を『信じてもらえない』と感じる経験が度重なった。その後、実父を相手に裁判を起し、その結果離婚した。その際、担当弁護士に対しても不信感を感じて、一度弁護士を変えた。二人目の弁護士と一緒に望んだ裁判の際に、CIへの性的虐待の事実が明らかとなった。

その後もCIの母方祖父母への反抗的態度が続いたため、両者間の関係が悪化し、アパートに母子で転居した。母子での生活が始まってから、今度は目立って実母に暴言を吐くようになり、CIの反抗的態度が強まった。しかし、学校での様子は《とくに気になるところはない》と担任から言われており、対人関係や学習に、表立った問題は見られなかった。実母はX年6月、担当弁護士を通じて、『CIへの心理的な援助をお願いしたい』とセンターに相談を依頼した。数週間後、センターに直接実母から相談の電話があり、その中でX年4月から月に一度、親子で児童相談所にも通所していることがわかったため、児童相談所とセンター間で連携を取り、当ケースの支援を行なうこととした。センターにおいては週に一回程度、親子それぞれ別のセラピストによる親子並行面接を実施することになった。

III 面接経過

1 子ども面接

第1期 虐待の再現とサバイバーとしての自己像 (#1~#11)

面接室に入室直後、実母と一緒に椅子に座っていたCIは顔を伏せたまま無言であった。しかし、Thから遊びに誘うとすぐに応じ、CIは別室に移動した。CIの視線は鋭く、Thの顔色を窺っているようであった。CIは箱庭の砂を“貝殻”に出し入れすることに没頭し、時折ふと我に返る様子は解離症状のようにThには感じられた。CIは、ぬいぐるみを「可愛い」と抱きしめた直後、すぐに床に落とした。また、Thのことを陰で「ばか」と呟きながらも、抱っこやおんぶを執拗に求めた。このようにアンビバレントな感情表現や執拗な身体接触を求める様子が見られた(#1)。CIはThに家で書いてきた手紙を渡し、密接な関係をとりがたうた。CIは遊びたいにも関わらず、遊びを選択できない自分に苛立っていた。その後、全ての“動物”を箱庭に投げ入れ、その後に使わない“動物”を除く方法で《動物園》を作成。動物を種類ごとにきちんと区画に分け、配置する様子は強迫的に安全を確保しようとしているように感じ取れた(#2)。

軽躁状態で、「うんこを食べるとおいしいな」という文字を描画用紙に書き、気持ちを切り変えられなかった(#3)。CIは、家で作成してきたThの似顔絵、手作りネックレス、折り紙の“蛙”を持参し、Thにプレゼントした。その後、Thに甘えながら、CIは折り紙で“おたまじゃくし”を作った。そしてCIは「私、赤ちゃん」と言いThに抱っこをせがんだ。Thに抱っこされCIが赤ちゃんになる姿は、CIが持参した“蛙”が“おたまじゃくし”になるイメージと重なった(#4)。“人魚姫”の顔から下を箱庭の砂に埋め、「苦しいと思う？」とThに尋ねる。Thの(苦しんでいるように見える)の返事に、CIは無言のまま「人魚姫の姿を恥ずかしいと思う？」と質問を重ねた。Thが(恥ずかしいと思う)と応えると、「でも人魚だよ」と冷淡で感情がこもらない言い方をした。その後もCIは無感情で“人魚姫”が虐げられるという表現を繰り返した。CIの表現は、熱い湯船に沈められた虐待の再現とThは捉えた。その後、CIは「生きていく為には仕方がないんだ」と動物界における

弱肉強食の世界を箱庭で表現した。最後は、“動物”が大地もろとも“瀧”に飲み込まれた。ThはCIの無力感や絶望感を感じた(#5)。“たこ”のぬいぐるみをお守りのようにCIは持参した。CIの“人魚姫”の首から下を砂に埋める表現に対して、Thが(苦しいよ〜)と訴えると、CIはさらに深く人形を埋めた。CIは、“人魚”の胸部だけ砂を除き「何だと思う？」とThに問い、Thが(おっばい)と答えると「わ〜！ 嫌だから！」と恥ずかしがった。そして“人魚姫”の胸に“鮫”を何度も噛みつかせた。その都度、“人魚姫”役のThは助けを求めたが、CIの「死めんだよ」との冷淡な言葉と共にお墓行きとなった。その後、箱庭のミニチュアは全て撤去され、砂だけになった。最後に、CIが砂を移動させる様子は、Thに海の波を思わせた(#6)。CIは、赤ちゃんになりたがり、Thが抱っこして過ごした(#7)。“馬の親子”の遊び。“子馬”は親が見守ることなく“熊”に噛まれて死に、砂に埋められた。やるせない気持ちになったThが、(母馬が何かしたら生き返ったりするかもしれない。おっばいをあげてみたら)と伝えると、「そうだ！ おっばいだ！」とCIは哺乳瓶で“子馬”にお乳を与える。CIは変化がないことに苛立ち、“子馬”を放り投げたが、その時偶然にも“子馬”が立ち上がり、CIは大変驚いた。その偶然をCIは遊びに上手く取り入れ、生き返る物語を表現した(#8)。

CIは児童養護施設に入所している児童と自分の境遇を比べ、「私だったら寂しい。ママと離れたくない」と語った。この気持ちを行動化するかのよう、別室にいる実母を、数回目で確認した(#9)。CIは自分の“好きなもの”の絵を描き、実母に見せた(#10)。実父の話題を語った後、“おっばい”“うんちとおしり”“立ちしょんの男子”の性的な絵を描き、軽躁状態になった。CIは“人魚姫”を箱庭の砂に埋めた。“王子”は“人魚姫”を助けるが、人魚であることがばれて、離れ離れになる悲劇の物語の後、“人魚姫”ではなく“シンデレラ”が海に飲み込まれ“王子”のキスで目が覚め結ばれるというハッピーエンドの物語が表現された。“人魚姫”が、CIの自己像と見ていたThは、CIの絶望感、喪失感に触れたように感じた。一方で、別の女性像が“王子”と結ばれる物語は、今後のCIの変容を示唆しているように見え、Thは微かな希望を感じた(#11)。

第2期 安全な居場所のイメージと感情表出 (#12~#25)

CIはクラスメートの話として「ノートの端から端まで、きっちりと字を書かなきゃ駄目って、すごい大変だと思わない？」と語るが、Thには、セラピー場面で見せる強迫的にきちんとしようとするCIの姿と重なった(#12)。箱庭で「怖い海蛇が魚をついばんでいる」という“海中の風景”を表現した(#13)。CIは「動物園より水族館が好き」と自分の好みをThに伝えた。また、Thの行動がCIの意図に合わない時、否定、禁止、苛立ちを言語化して伝えた。児童養護施設に入所している他児を見かけた際、CIは「小さい子って嫌い。うるさいもん」と顔をしかめ、嫌悪感を示した(#14)。CIは、窓から見える木に“鳥の巣”を発見し、気にかけた(#15)。

CIは、“鳥の巣”を「取ってみたい」と繰り返し訴えた。Thが“鳥の巣”を絵で描くという妥協案を提示すると、CIは応じた。CIは「母鳥が卵を温めている冬の巣」と、Thが書いた絵に題名をつけた。その上で、CIは「春の巣も書いて」とThにおねだりした。Thが“春の巣”を書くと、CIもさらに別の紙に真似て、“春の巣”を描き、鳥の親子も追加して描いた。その隣に“カラス”を付け足し、「襲おうとしているところね」と言ったが、「やっぱり挨拶していることにしよう」と「こんにちは」とのコメントを書き加えた。“カラス”の横には、大事にしている“たこ”とCIの姿を描いた(自由描画：1)。絵を見ながらCIは、「子は親を選べないんだよね…」と語り、Thから(選べたらなあって?)と伝えると、CIは「うん」と否定したが、その様子は考え深げであった(#16)。生まれ変わるとしたら「たこになりたい。そしたらワニにも食べられないし、海の一番深い所にいれば安心だから」と、深海がCIの安全な場所だと語った(#17)。CIの箱庭は、動物が種類ごとにきっちりと分けられており、その表現から、CIにとっての安全な場所は徹底された空間のみであり、しかも安全を確保し続けるためには多くのエネルギーが必要なのだとThは感じた(箱庭：1)(#18)。CIは“たこ”のぬいぐるみを持参した。CIは「何も置かないで砂を触る」と言い、箱庭の砂の感触に浸った(#19)。これまでの展開と異なり、CIはThのペースに合わせながら、一緒に折り紙を完成させた(#20)。CIはプレイでやりたい



#16 自由描画：1 《鳥の親子》

ものを言うがぴったりするものがなく、一つ一つ二人で一緒により近いものを探した (#21)。

初めてスカート姿で来初した。施設内を探検したいと言うので、一緒に歩く。年長児におんぶされている子を見て「いいな…」と羨ましそうにしたり、同年齢児を見て「友達になりたかった」と語るなど、他児に目を向け素直な感想を述べていた (#22)。《自分と友達》と題する絵を描いた (自由描画：2) (#23)。

CIは《自転車に2人乗りしている女の子》の絵を描いた。絵の女の子は、頭と体のバランスが悪いが、表情は和やかであった (#24)。CIは、「あいつ何かひどい事したんだよ」と実父から受けた過去の身体的虐待の話をした。その後、うっすらと残る身体の傷をThに見せた。CIは「私、馬鹿でしょ。嫌だって言わなかったんだよ。馬鹿だよ。怖いと思って言えないのは、当たり前のことなんだよ。私でも言えないと思うよ」と伝えると、



#23 自由描画：2 《自分と友達》

「でも、馬鹿だよ…」とCIは呟いた。その直後、Thが描いた絵にある黄色の部分見て、「おしっこ！ わ〜おしっこ飛ばしている」と下腹部を前に出す仕草をしながら大笑いし、突如軽躁状態となった。Thは、実父の話題に触れたことに伴うフラッシュバックだと捉えた (#25)。

第3期 心身のケア (#26~#33)

CIは《将来》の絵を描いた。CIは「夢に出てくる家」と言い、母親と「2人で住んでいる。こんな家には住めないけど、将来住みたいなあ〜」と淡い願望を語った。CIの自由画には、母子で住みたい“家”“家に続く道”、飼っている“馬”、川辺でおしゃべりしているCIとTh、川の中で交尾している“魚”、山に続く“道”などが描かれている。Thは、“馬”や“魚”のリアルな描き方、途切れた道の表現といった点を気かけながらも、和やかな雰囲気を大事にしたようなCIの願いを大切に扱うこととした (自由描画：3)。

CIが家から持参したビーズをThに見せ、「これ盗んだ。友達のだったやつ。もってきたんだ」と悪気なく語る。Thから(その友達、探してなかった?)と尋ねると、「探してたよ。でももう付けちゃったから」と軽く語るCIの悪気のなさが、Thは気にかかった (#26)。おくるみに包まれた“ふくろう”のぬいぐるみを持参した。生活場面で時折母親に対して行うような感じで、Thに威圧的な言い方をしたが、すぐに自分の言動を反省し、柔らかい口調に言い変えた。Thは(相手が受け入れやすい形で伝えると気持ちがいいよ)と伝える



#26 自由描画：3 《将来住みたい家》

と、CIは頷いた。その後、二人で一緒に絵を完成させた (#27)。

ミルク飲み人形を持参した。CIは、人形をあやしながら、『自画像』を描いた。描きながらCIは「早く大人になりたい」、大人は「誰にも何も言われず自由に振る舞える」存在だと語り、干渉されずに自由でありたいと語った (#28)。



＃29 箱庭《街》

箱庭：左上には“動物園”。右上には“神”、“大仏”、“自然”が所狭しに置かれている。中央は“街”で、人が集まっている。下方には“海”、“動物”を並べた。全体を三層に分け表現している。箱庭から、“ガラス玉”で色鮮やかに飾り、神仏といった守りの存在が出現し、海と陸地を繋ぐ橋を表現するなど、以前の箱庭と比べると、変化を感じ取れた。また、どのミニチュアを用いるか、何度も吟味を重ね、選択するという徹底ぶりにCIらしさを感じた (#29)。

Thが足を軽く負傷した。CIは無言ですぐに動き、処置をした。身体への対処は早い、感情面のケアのなさが気にかかった (#30)。

CIは産着に包まれた「笑顔の赤ちゃん」を折り紙で作った (#31)。CIは面接室においてあった他児の粘土作品を勝手にちぎり、自分の作品に使用した。CIのわざと悪ぶる態度が、Thは気になった (#32)。CIが学校で怪我をし、顔面にテーピングをして来所。怪我した時のことについてCIは、「口からいっぱい血が出た。口に砂がいっぱい入り込んで…痛かった。でも今は大丈夫」と淡々と語った。そして「泣かなかった。泣いたって治るわけない。泣いたって無駄でしょ」と痛みの感情に触れ難いCIの姿が、Thには逆に痛々しく感じられ

た (#33)。

第4期 自己像の回復 (#34～#44)

CIは、センターの近くにある川での魚獲りに熱中した。魚が獲れず残念がるCIに他児が魚をくれた。CIは嬉しい半面、実母が嫌がるだろうと気にしたが、実母は承諾し、魚を家に持ち帰った (#34)。再び川に行くが魚は獲れず、その悔しさをThに責任転嫁した (#35)。また川に行くが魚は獲れない。獲れない理由をThのせいにしたが、熱中するにつれ不満は収まる。Thが終了時間だと告げるとCIは「最後に1度」と懇願する。その時、魚が釣れ「やった！ 嬉しい！ 先生がチャンスをくれた…ぎりぎりでも獲れたんだよね！ 嬉しい！」と大興奮。CIは試行錯誤の末、達成感を得た (#36)。前回の魚について「殺した…あっ間違った、死んだ」とThを驚かす。後で川に逃がしたことをThは知り、驚いた気持ちを伝えると「殺すわけないしょ、ごめん間違った」と笑う (#37)。CIは、花壇でもぎ取った花を「綺麗な花があって、落ちていたから拾った」と言い、実母に見せた。CIは嘘をついた (#38)。

めだかを見たCIは「こんなに沢山いたら…男も女もいるね、そしたら…うふふ」とにやける (#39)。実父とのエピソードに触れ、当時の違和感を語った。そして「お母さんは知らなかったよ、だってお父さん、お母さんの前では商売《＝演技の意味だとThは受け取った》してたんだもん。言ったら駄目だって(実父に)言われて、(実母に)言えなかった」と吐露し、抑えていた自分の気持ちとともに実父の奇異な行動を語った。その後、怪談話をしたり、CIが苛立つ場面があるが、Thが声をかけ続けるうちに落ち着いた (#40)。

CIは終始穏やかな雰囲気であった (#41)。CIは、学校の宿題、宝石箱、これまでの箱庭写真を家から持参した。CIが持参した宿題を終わらせ、公園に行く際、気持ちが開放されたようにはしゃぐ姿があった (#42)。CIは「見ててね」とThに言う回数が増え、ThはCIが自主的に動いていると感じた (#43)。Thがセラピーに少し遅れ謝ると、CIは「私も学校からちょっと遅れて帰ってきたから」とフォローしてくれた。CIは10曲ものリコーダー演奏をThに披露した。

Thは、CIがセラピー場面や日常で落ち着いてきていること、実母の稼働話が浮上したことなど

から、面接終結を考えている旨の話をした。CIは「お母さんは大変じゃない。(面接を) 終わりたい」と拒否した。Thは、CIが前より色々なことに興味をもち楽しそうに過ごしている、CIの変化を感じているなど、感じていることを伝えた。その上で、(今困っていることはない?) と尋ねると、CIは「前の学校ではいじめられたけど、今の学校では仲良くやっている」と学校生活を語り、また、「馬鹿じい」と実父をけなした。その直後、「(実父と) 一緒にいた時は嫌だったけど」今は困った事はないと語った。CIは、虐待を実母に告白した時のことについて触れ、「あの時、お母さんが気づいてくれた」と言った。Thは実母が気づいてくれたからこそ今の自分があるとCIが言っているように感じられた。

その後、可愛らしい“人魚”の絵を描いた。これまでCIは、自分が失敗した作品は面接室に置いていき、上手くいったものを家庭に持ち帰っていたが、今回は上手く描けたにも関わらず置いて帰った(自由描画：4) (#44)。



#44 自由描画：4《人魚》

2 親面接

第1期 後悔と自責感情を語った悲嘆の時期 (#1～#9)

CIが虐待の事実を告白した直後、『ママは本当に知らなかったの? 本当は、知ってたんじゃないの?』と疑われ、身の置き所がなかった』と実

母は話した。母子での生活が始まってからは、CIが実母へ暴言を吐くなどの反抗的態度が強まったと話す(#1)。『CIは毎晩のように自慰行為をしている』という。実母はCIが虐待事実を告白するまで『虐待に気づけなかった』ことを後悔し、泣きながら『気づけなかった』と、Thに繰り返し語った。CIの実母への暴言や反抗的態度は続いており、親Thはく実母への試し行動の可能性があると伝え、CIの表現について、実母の理解を促した(#2)。『CIは、私への暴言が減って甘える行動が増えた』という。また、実母がCIの下校時刻までに帰宅が間に合わなかったとき、CIは30分も外で待っていて、実母が『よく泣かないで待っててくれたね。えらいね』と褒めると、CIはとても喜び、帰宅後も『いい子でいよう』としていたという。この出来事からも、『私に褒めてもらいたい気持ちが高まっている』と実母は理解し、CIの変化を感じていた。さらに日常場面のCIの変化として、『虐待されたことを私に語る回数が減った』と伝えた。親Thは、くCIをよく見て、理解しようとしている』と述べ、実母の態度を支持した(#3)。

実母は、『高校時代から家族に自分の話を聞いてもらえず、今でも実家に不信感がある』、『今振り返れば、CIの反抗的態度は祖父母への試し行動だったと思うが、理解されなかったことでCIと母方祖父母の関係も悪化している』と、原家族への不信感と、今は頼れない気持ちを泣きながら語った。そして、『虐待をなぜ見抜けなかったのか』との後悔を再び口にした(#4)。

CIの実母への暴言が減少した。『拍子抜けするほど素直な状態になった』、『絵本を読んで涙を流すという、以前にはなかった感受性を見せるようになった』と、CIの日常場面における落ち着きと情緒的变化を実母は感じた。また、動物の出産ドキュメンタリー番組を母子で見たその夜、CIは「虐待体験を夢で見た」と言って起き、「誰も助けてくれなかった」と実母に伝え、陰惨な夢の話を書いた。そのとき、実母は『申し訳なさを感じながら、絵を描くCIにずっと寄り添った』と、涙を流しながら語った。また、『週に一度センターで話すことで、自分自身が楽になっていることに気づいた』とも語った。この回、母子の情緒的なコミュニケーションが円滑になり始め、親Thは、心理的安定を取り戻す兆しを感じた(#5)。実母は、

嗚咽しながらCIが虐待事実の告白をした日のことを、あらためて詳細に語った(#6)。CIは熱湯に沈められた場面や、下腹部を暴行された夢を見た、と夜中に起きてきて、実母に語ったという。実母は、虐待の再現と思われる話を聞く度、実父への『憎悪を感じる』と涙した。そして、実母が実父のストーカー的とも思える執拗な態度に根負けし結婚に至った経緯と、結婚後に『釣った魚にえさはやらない』と豹変した実父の二面性について語った。また、実父と生活していた時に実母は、CIの身体の傷に気づきCIに尋ねたことがあったのを思い出し、『今となっては、CIがごまかすように説明していたように感じられる』こと、また、実母は『その説明に違和感があったものの、追及しなかった自分がいた』と、罪悪感について涙ながらに語った(#7)。『CIは、されたひどいことを夢でよく見るようで、そのたびに起きてきて自分に話をする』と実母は語った。直近では、『閉じ込められた部屋の四方の壁から手が出て、CIを捕まえ、壁に同化する』というもの。実母は『つらいけど受けとめて聞く』ようにしていると、泣きながらに語った。また、最近CIは『赤ちゃん返りのように、私の乳を飲みたがる』とのこと。実母は『愛情のかけ方が少なかったからだ』と悔やむ。赤ちゃん返りや夢での被虐待行為の再現は、CIのセラピー場面にも現れた。親Thは、実母に対して、これらはCIがトラウマからの回復過程にあるからこその表現だと感じていることを伝えた。そしてThは、実母が日常場面で積極的にCIに関わっている点を強調した(#8)。

実母は『普段の生活の中で、あいつ《実父》に見つかる恐怖に怯えている。悪いことをしていないのに、隠れるような生活をしなければならない。今はまだCIのセラピーを優先したいがいずれ遠方への引っ越しも考えたい』と日常生活の立て直しに目を向けるのと同時に、実父への苛立ちと、『子どもを守れなかったという自責の念ばかり浮かぶ』と、泣きながら心中のつらさを吐露した(#9)。

第2期 子どもを理解し受容しようとする姿勢と実母自身の心理的整理の時期 (#10~#21)

自家用車を購入し、仕事を再開したい気持ちを語るなど、生活に前向きな意欲が見られた。この

回は、初めて涙を流さず、笑顔もみられた面接となった(#10)。CIが、実父に何度もスーパーに置き去りにされたことと実母に話したことから、『別居後、CIはスーパーを怖がり全く行けなかった理由が始めてわかった』とのこと。また別居してしばらくの間、CIは拒食と過食を繰り返し、実父がいなくても関わらず、「あいつ《実父》がこっちを見て笑ってる」といった幻覚様症状が見られたことに触れ、『これは虐待の後遺症ではないか』と言い、CIの行動を理解しようとした(#11)。CIの実母への反抗的態度が消失。実母は『1年前とは比較にならないくらい落ち着いた生活になった』との実感を伝えた。実母は就職について前向きな姿勢をもつ一方、『男性恐怖があり、不安だ』と心境を語った(#12)。CIは、『大事にしている物をあいつ《実父》が壊して捨て、《実母には言うな》』と脅していたことを実母に伝えた。実母は、CIが実父と生活していた頃、『不自然な物の壊し方や失くし方をしていたこと、おもちゃを貸せない、外出の時はぬいぐるみを必ず持参する、おねだりがしつこいなど、物への固執が強かったことの謎が解けた』という。最近では、『良い意味で物への執着が薄れてきている』と実母は感じた。実母は、CIの言葉を全面的に信じる態度で、CIの心情や立場を理解しようとしていた(#13)。

家の中で、『CIが『生まれ変わりたい、赤ちゃんからやり直したい』と、赤ちゃんごっこをせがんだ』とのこと。赤ちゃんごっことは、CIが自分を“実母”役、実母を“可哀そうな赤ちゃん”役にして“可哀そうな赤ちゃん”を放置し、助けを求めさせる遊びを繰り返すというものであり、実母は、実父からの受けた心の傷の表現だと捉えた。親Thは、実母がそのような考えて受けとめたことを支持し、くプレイセラピー場面でも同様の遊びをCIが求めている、CIがもう一度赤ちゃん時代をやり直したいと思っている気持ちの表現だと思われる』と、実母に伝えた(#14)。今まで実母が聞いたことがなかった過去の被虐待体験を、CIが語ったという。当時、CIの表情が暗かったことだけは実母も覚えており、その意味について気づかなかった自分を責め、久しぶりに涙を流した(#15)。

『面接の最初の頃はCIから信頼されていない感じがあって不安も強かったけど、今は心の距離が近い感じ』と語った。CIの機嫌が悪く、意地悪な

言い方をしたとき、実母は『そんな言い方をなんですのかな…悲しくなるなあ』と気持ちを受けとめつつ、表現の仕方に工夫が必要なことを穏やかに諭した。するとしばらくしてCIから「ごめんね」と素直に謝るようになった。また、母方祖父母との交流が再会された(#16)。家族のアルバムを時折見ているCIが、最近「悲しくなるから見たくない」と言い出した。時折意地悪な言い方をすることもあり、CIの揺れる心情に対して、実母は受けとめる態度を一貫して示している様子があった。親Thから、実母のひたむきさを労うと、『CIのことは頑張っているが、実は自分もつらい。今でも家の中であいつ《実父》の影を感じ怖い。男の人も怖くて、エレベーターの相乗りはできない』とつらさを語り、涙を流した。(#17)。

母子での生活が安定してきたのを実母は感じている。その上で、実母は『子どもの虐待のことに触れられるようになったが、まだ整理しきれない』と語った(#18)。前回までのCIの意地悪や機嫌の悪さなど情緒不安定さは和らいだ様子あり。『娘の状態が良くなってきたと思えるようになった』と語った。一方、実父にどこかで会うかもしれない恐怖を実母は語り、転居したい気持ちが強まっている様子であった(#19)。『CIが突発的に意地悪になる時がある』という。実母は、CIがフラッシュバックを起こすように突発的に怒るのではないかと考え、その原因は自分だと責めた。その上で、実母は『私もフラッシュバックに苦しんでいる』と言い、実父への恐怖が蘇ると告げた。親Thは、CIの心情や背景を理解して関わろうとする実母の姿勢を支持した(#20)。

CIが今まで話していない壮絶な性的虐待体験を実母に語り、その話の最後を「私は気持ち悪いよね」と自己否定感で締めくくった。実母は『CIは気持ち悪くない。気持ち悪いことをしたのは実父だ』とCIに伝えた。話して『CIの気が楽になったようだった』と実母は感じた。しかし、『衝撃的な内容を、内心受けとめ切れなかった』と、面接場面で実母は号泣しながら話した。日常生活ではCIを受け容れようと努力しているが、実母自身、整理できない気持ちがあり混乱していることが窺われた。そして、コントロールできない男性恐怖を抱えながらも、そこには前に歩みだそうとしている実母の姿があった(#21)。

第3期 内面の葛藤の理解につとめながら、行動に移し始めた時期(#22~#33)

実母は勇気を出して、母子でピアグループの会に参加した。実母は『自分だけじゃないんだ』と吹っ切れ、『気持ちが開放された』と語った。この体験により、実母は恐怖心が和らぎ、人が多く集まる場所への外出が可能になった。面接中、『母子家庭ですけど何か?』という強気のフレーズを繰り返した。母子家庭である事を引け目に思わずにしようという気持ちを表現しているようであった(#22)。実母は人が多いスーパーでも買い物を楽しめるようになり、CIも実母の雰囲気を感じたのか、お守りのように必携していたバッグを持たずとも外出可能になった(#23)。実母は『母子家庭と言いたい人には言わせておけばいい』と引け目感をきっぱりと捨て去る発言をした(#24)。

実父と同じ車種の車が、家の前に止まるという出来事があり、『ようやく周囲への恐怖心が薄れたのに、逆戻りの心境だった』と、このことを語ることに時間を費やした(#25)。前回の出来事の影響により、実母は就職と転居をしたい気持ちが強まった様子があった。CIは些細なことで「ママなんか私が死んじゃえば良いと思っているんでしょ」などと自己否定感を実母にぶつけるが、実母は『家族や大事な人は、互いに大切にしなければ』と、CIに伝えている様子。親Thは実母のCIとの関わりを支持した上で、<CIは被虐待体験の影響から自尊心が低下していたり、他の人を大切にすることは理解できるけれど、実感は得にくいかもしれない>と伝えた(#26)。新学期を機にCIの苛立ちは収束した。親Thは実母に、<実母の一貫した関わりが浸透したのでは>と示唆した(#27)。CIは幼少児を見た時にイライラすることがあり、実母は、『実は自分も、小さい子を見ると無性にイライラする。そんな自分が怖くて心療内科に行ったこともある。昔は普通にかわいいと思えたのに』と号泣しながら、CIと同じ感情があることを吐露した(#28)。就職について、具体的に考えていることを話した(#30)。映画のキスシーンを見てCIがふざけて真似た時、実母は、『再び後悔と実父への怒りが湧いた』と話す。そして自分の学生時代に対人トラブルがあり、被害者なのに周囲の人に信じてもらえなかった傷つき体験と、実父との、振り返れば不本意な結婚の経緯を泣きながら語った。実母は、『就職活動を始めるつ

もり』と明るく話して面接を終えた (#31)。実母は、赤ちゃんを『かわいい』と思えたり、被虐待児の手記を読んでもみるなど心境に変化があるとのこと。そして、『CIの思春期を支える土台を今つくりたくない』との覚悟を口にした (#32)。CIは失敗したとき、「自分がバカだったから」と自罰的に捉える傾向があると実母は語る。そのとき実母は『失敗をしたのはバカだからではない』と伝え続けているという。実母は就職活動を始めた (#33)。

第4期 再出発 (#34~#44)

実母は就職活動や転居など、一步ずつ前に進もうとしていた (#34)。学校でのCIは、対人関係でトラブルになりそうな時は、まず自分で対処方法を考え行動し、それでも駄目な時は担任に助けを求めている。学校でも家庭でも安定しており、『頑張り過ぎてはいない』と実母は感じているようであった (#35)。実母は、就職活動をする中で男性恐怖症的な症状も緩和され、更に実父への怒りの感情も『憐れみ』へ変化したことに、自分自身驚いていた (#36)。

実母の就職が決定した。『いよいよ』始動という気持ちであり、『これからの期待が生活を支えている』と語った。実母は、CIにも『働く事になったので協力して生活していこう、それぞれが出来る事をしっかりとがんばろう』と伝え、その気持ちに応じるかのように、『CIは学校生活を頑張っているようだけど、CIは自分を良い子に見せる為に嘘をつくときがある』と実母は語った (#39)。

実母は、『嘘や誤魔化しが実父と似ている』ため厳しくしたり実父に似ていることに嫌悪感を抱くと語る。そして実父の過去の具体的な行動を語った。実際その行動は健全ではないと親Thも感じたが、実母は『自分の思考が固いから許せないのかもしれない』と自尊感情を低くし、物事を捉えていた (#40)。

実母が稼働開始した。CIが自主的に考え行動できていることを実母は喜び、安心した様子 (#41)。実母としては、『いつまで続くのかな』と思うほどCIが落ち着いていると語った。学校生活でもCIの担任から対人関係面で成長していると評価された。仕事も家庭も順調だと語った (#42)。実母は『仕事や引っ越しは大変だが、前に進む一歩だと感じる』と前向きであった。実母の職場の歓迎会で『男性と接する事を苦痛に感じる

こともある』と周囲にいる人に伝えたが、『翌日の職場の雰囲気は、とくに変わりがなかったことに安心した』と語った (#43)。CIが強引に友達と物々交換していたことがわかる。その際、実母は、物を大切にす気持ちや親が働いて得たお金の大切さをCIに伝え、CIの成長に伴う課題にも向き合っている様子が親Thにも伝わった。最近CIが、『(実父は)残念な(実)父だったけど、良い父であれば欲しいと思っている』と穏やかな表情で実母に語ったとき、CIの心が変化したことを感じ取ったという。また、実母は『一日の時間が短すぎる。あと4時間欲しい』と言い、現実に向き合い、意欲的な構えを見せた。実母の稼働状況から定期的な通所が困難になってきたこと、実母が『CIとやっていく』自信を感じている状態であることから、何かあればまた連絡をもらうこととし、面接は終結となった (#44)。

IV 考 察

本研究では、実父から性的虐待を受けたCIと、非加害親としてCIのトラウマからの回復を支えようとした実母に対して、二人のセラピストによる親子並行面接を試みた。CIの面接経過からは、トラウマ回復への心理的変化と描画の意味、親面接経過からは非加害親への支援のあり方と子どもの回復のための非加害親のあり方、そしてセラピスト間の連携のあり方の3点について考察する。

1 CIのトラウマからの回復過程と描画の意味

最初に4つの回復過程について検討する。第1期は、CIのアンビバレントな感情表現や執拗な身体接触、そして解離と思われる症状が見られた。また、実父の話題に触れると、性や排尿の話が突如語られ、軽躁状態になった。そして、ミニチュアを用いた辱めや虐げられる場面の表現は、虐待の再現と考えられた。また親面接から、生活場面ではCIの自慰行為、攻撃性、悪夢、幻覚と思われる症状があることがわかった。これらの症状は山本(2010)の《子ども性暴力被害によるとみられる問題症状・行動》に一致するものが多い。CIは、虐待の再現と思われる場面を遊びで表現し、Thにその場面についての感情を尋ねた。それは想起場面に絡む感情にThを直面させることを意味し、CI自らその感情に触れようとしていたと考

えられた。

Braun (1988) や Johnson (1989) によれば、トラウマが解消され自己イメージに統合される過程は再体験 (Reexperience)、解放 (Release)、再統合 (Reintegration) という3つの過程を経る。この三つのRモデルによれば、CIの表現は、その最初の《再体験》の段階と言えよう。赤ちゃんになりたがったCIは、西澤 (1999) のいうように退行することで、Thからエネルギーを得ていたと考えられる。CIは面接が進むにつれ、助けを求めても救われない弱肉強食の世界を表現し、抵抗できない圧倒的な力への無力感や絶望感をThは感じた。それは、性的虐待・家庭内性暴力被害の特徴の《孤立と無力化》(山本; 2010) に重なる。

セラピーの中で、死んでしまった“子馬”が、CIに放り投げられる中で偶然立った。この出来事をCIは意味のある偶然として汲み取り、生き返る物語ととらえた。Thには、死と再生を表現したCIの力が、性的虐待を生き抜いてきたCIの状況と重なった。そして、今後の面接への微かな希望を感じさせる新たなお姫様が出現する物語は、CIの育ち直しを象徴しているようでもあった。この時期は、虐待を再現するとともに、生と死を生き抜いてきたサバイバーとしての自己像を表現した時期と考えられた。

第2期は、深海が安全だと語るCIから、傷つきを癒すには内面の深みに降りていかざるを得ないことが窺われた。西澤 (1998) や山本 (2010) が虐待児の心理的回復にとって最も大切なのは、安心・安全な場だと述べているが、CIにとっては生活場面だけではなく、心理的にも安心・安全な場に《自分がある》というイメージを作ろうとしていたと思われる。この時期、鳥の親子の在りようを気にかける様子は、CIの今後を鳥の親子に託しているようであった。CIの「子どもは親を選べない」という言葉の重みをThは痛感した。同年齢児への憧憬と共に低年齢児への攻撃性といった感情が表出した時期に、実父からの虐待行為を言語化し、自身への否定感が述べられた。その際、実父の話題に触れることはフラッシュバックを起こさせるとThは実感した。この過程は《解放》(Release)の段階と考えられた。この時期、CIは安全な居場所イメージと感情表出により新たな自己像を模索していた。

第3期に入ると、生活場面での悪夢が影を潜め、

将来の淡い期待を感じさせる夢を絵で表現した。それは新たな家族像や将来の自己像に触れることにも繋がった。またぬいぐるみを世話する様子は、CI自身への心理的ケアを思わせた。学校場面では嘘をつく、物を窃取する行為が見られたが、実母が一貫した態度で関わる中で収束していった。Thが面接場面で軽い怪我をした時に、身体へのケアについては積極的に関わるも、怪我について心配するなどの感情は湧かず、処置するまでに至らなかった。これは、CI自身が怪我をした時も同様であった。虐待行為を我慢し続け、実父の言いつけを固守し続けてきたCIの残像はあるものの、その後、「あの時は痛かったけど今は大丈夫」「泣いたって無駄」と語り、痛みを語れるようになったことに、ThはCIの内面に変化があったことを確認した。

第4期は、枠組みが整った面接場面から、公園や川といった屋外での自由度の高い場面へプレイセラピー場面を移行した。たとえば魚獲りを通して自らの苛立ちや不満感をストレートに表現したり、達成感や自己効力感を得る体験を重ねた。最終回では、実父のことを客観的に語り、過去のこととして気持ちに折り合いをつけようとした。そして、CIの「あの時、お母さんが気づいてくれた」との言葉は、実母が自分を助け出してくれたからこそ、今の自分があると語っているようにThには感じられた。西澤 (1999) がまとめているように、この言葉による表現は、これまでの遊びによる表現の延長上にあるものと考えられた。

言語化されたものに呼応するように、イメージの変容をCIは絵という表現方法でThに伝えた。それは、面接開始当初、虐げられる役の投影と考えられるミニチュアの“人魚”が、中期は深海で“たこ”に姿を変えながら安全な場所で傷を癒し、最終回には可愛い“人魚”へと姿を変えた。この表現は、人魚が新たな生を獲得し、息を吹き返した《再統合》(Reintegration) という一連のトラウマ回復の表現ではないかとThには感じられた。また底から這い上がろうとするCIの内面の強さがこの面接を支え、家族を回復へと導いたと思われた。

小山 (2002) の思いの理論でとらえれば、第1期は「苦しむ」、第2期は「ふれる」、第3期は「つかむ」、そして第4期は「収める」段階と考えられる。第3期において、CIは「将来の家」「干渉され

ず自由でありたいという思い」「守りの神の存在」「痛みの感情」等をつかもうとした。一方、実母は「自分だけじゃないんだという思い」「恐怖心」「引け目」「買い物を楽しもうとの思い」「就職に向かう力」等をつかもうと努めた。それぞれが奮闘しているありようが感じられた。

描画については、4枚の自由描画は語義通り自由な枠組みでの描画であったことが特徴としてあげられる。ここでは本論文に掲載した自由描画1と3について検討する。

小山(2008)創案の自分描画法(Self-Portrait Method; 以下SPMと略す)では、思いを浮上させることを目的として、「自分描画→気になる何か→背景→隠れている何か」を順次描いてもらう。そして題名をつけ、絵を見て何かしら思いついた物語を話してもらう。一連の行動は、治療的対話を深めるためのひとつの手段として位置づく。#16の自由描画1では、次のような臨床展開が見られた。

CIが「鳥の巣」を発見(気になるものとなる)。

Thが「鳥の巣」を描画すると、CIは「題名」をつけ、さらに「春の巣」を描くよう求めた。Thが「春の巣」を付け加えた。するとCIは「鳥の親子」を描き、すぐ近くに「カラス」を描いた。カラスはCIにとって「隠れたもの」と考えられ、かつ「恐怖対象であり、身近な生き物」でもある。これについてCIは「襲おうとしているカラス」と「こんにちはと挨拶するカラス」の狭間にあり葛藤する。しかし「挨拶するカラス」に寄り添う。「たこ」と「CI自身の自己像」は自分の分身と自分像と考えられ、最後に描いた。

一方、#26の自由描画3ではいきなり気になるものとして「自宅」が出現する。そして背景として、「先が途切れている道路、馬」が描かれ、次に隠れているものとして「交尾する魚」が描かれた。交尾する対象が「人間」ではなく「魚」になったことは、年齢相応の興味・関心の出現と、「怖くない」という思いの反映と思われた。そしてCIは最後にThとCIが寄り添う姿を描画している。最後に「自分」がくる。今のCIは「最後が自分」と言っているように思われた。

セラピー場面で自分描画を急がせなかったことが治療展開に有効に働いたと考えられた。SPMの4つの要素は重視するものの、本事例は、描画

順序に縛られないようにすることが大切だということを教えてくれている。

今後の留意点としては、一連の被虐待体験がCIの成長過程に及ぼす影響についてであろう。面接最終回にCIが描画表現した“人魚”は、年齢以上の女性で、かつ性的なものをも感じさせた。

Petersonら(1997)による「子どもの人物描画用スクリーニング調査指標」を参考にすると、描かれた人物画は自発的な自由画であったため自己像と考えられることから、“人魚”は《性器の隠べい》に当たるのではないかと考えられた。セラピーによって心理的变化や日常場面での適応に良好な変化が見られたCIだが、意識下に潜む自己イメージには、性的虐待の影響が残り映し出されている。CIにとって性的虐待の傷痕は、非常に根深いものだと感じられた。

CIとの関わりについて述べれば、性的虐待によるトラウマを抱えたCIへの心理療法として、いわば第一ラウンドが終わった段階だと考えている。西澤(2011)は、《思春期以降には、性的虐待の影響は心理的・精神的症状として現れることが少なくない》と述べている。また、安齊(2002)も性的虐待を受けた女性との面接で《精神的、性的パートナーの獲得を再外傷化することなく達成していくという課題がある》と述べている。これらは、今後、CIが思春期を迎え、対人関係の深まりや性的な課題に触れる際に、留意すべき点となるだろう。次の課題は、CIが適度な距離を保ちながら男性と関わるようになることであろう。生きにくさを抱えやすい人だろうということは容易に察知できることから、非加害親や周囲の大人が十分留意し対応していくことが必要だと思われる。

2 非加害親への支援と子どもの回復のための非加害親のあり方

非加害親への支援の中で扱う課題として、岡本ら(2011)は、《性的虐待事実の受けとめ》、《子どもが受けた被害についての理解(虐待の影響)とケアの必要性》、《子どもの性の発達に関する理解》、《性的虐待の家族への影響についての理解と家族関係の見直し》、《非加害親の果たすべき役割とできること》、《再発防止ときょうだいの被害予防のための方策の検討》の7点を挙げている。

本事例の場合、親面接において取り扱った課題は、主に《性的虐待事実の受けとめ》、《子どもが

受けた被害についての理解（虐待の影響）とケアの必要性》、《非加害親自身のケア》の3点であった。

面接時期を振り返ってみると、第1期はCIの虐待についての告白、家庭崩壊の中で実母自身が混乱状態であったこと、CIのフラッシュバックや自慰行為といった虐待の後遺症、実母への暴言や反抗的態度への対処が面接課題であった。面接場面では過去のCIの行動を振り返る中で、虐待を見抜けなかった自分自身への苛立ち、CIを守れなかった後悔と自責の念を繰り返し語り、実母が性的虐待の事実を受けとめようと向き合った時期だったと考えられる。

第2期では、実母は過去のCIの行動を回想しながら、CIの行動と虐待行為を関連づけ、理解しようとし始めた。CIが受けた被害についての理解（虐待の影響）とケアの必要性を感じ、自分自身を動かそうとし始めた時期だと考えられる。第2期において、CIは日常の中で実母への反抗的態度が減少し、赤ちゃんごっこを要求するという形の甘え・退行が表出した。このことは、CIに安全な生活の場が提供され、実母との愛着の修復が図られたことを意味する。

第3期は、実母は内面の葛藤の理解に努めながら新しい生活のために行動を開始した時期である。日常で表出するCIの心の揺れや問題行動に対しても、試行錯誤しながら一貫した態度で接し、CIの日常に治療的に関わることができていた。そして、第4期では、男性恐怖がありながらも就職に踏み出すなど現実を進もうとする速度が加速するように、実母が力を取り戻していく様子を親Thは感じた。またセラピーの期間、実母はCIと向き合おうと努めたことで、親子関係の修復と再構築が図られていった。

全4期を思いの理論（小山：2002）で捉えると、第1期は思いに苦しむ段階、第2期は思いにふれる段階、第3期は思いをつかむ段階と言える。この期に実母は「ピアグループの会」「自分だけじゃないという思い」「恐怖心」「外出」「母子家庭」「買い物」「イライラ感」「傷つき体験」不本意な結婚、そして「就職活動」をつかもうとした。そして第4期は思いを収める段階だったと見られる。このプロセスは、CIのトラウマからの心理的回復過程とよく似ている。

親面接の中で、実母の言語化された感情を受け

とめ続けたことや、CIに対する心理教育的なアプローチが、非加害親自身のケアとなったと考えられる。しかし、男性恐怖や、実母の実父への感情整理の点については、まだ十分に介入できたとは言えず、今後の課題として残る。

子どもの性の発達に関する理解の点については、CIが幼かったために今回は取り上げなかったが、今後も懸念される点である。

Saundersら（2000）は、非加害親の望ましい態度として、以下のことを指摘している。

「子どもの虐待に関する説明を信じる、加害者である配偶者から独立した意識を作り上げる、その子どもを情緒面で支援する、加害親が継続して子どもに与える恐怖感を理解する力を養う、子どもを救うために必要な場合は介入する力を持つ」と。

実母は自分自身、実父の性的虐待行為、家族の崩壊に傷つきながらも、CIの告白を受け容れ、実父と別居し、親子並行面接に長期間通所する中で、CIの行動や心情を理解しようとし続けた。そして、CIとの生活を守るために現実を力強く歩み始めた。セラピー全体を振り返ってみれば、非日常で行なわれるCIのセラピーと、実母が日常で行なう治療的な療育とが上手く連携し、さらにそれが機能し、結果としてCIの心理的回復につながっていったものと考えられる。

なお本事例においてTh側の課題として、機関連携のあり方が挙げられる。面接当初、実母は虐待事実発覚時に関係機関に助けを求めたが、ソーシャルサポートを受けられなかったという孤立感と不信感を抱えていた。我が国では、性的虐待という社会的に受け容れがたい文化が横たわっていることは否めない。子どもの心理的支援に関わる専門職にある者は、より高い意識を持つことが求められていることを肝に銘じたい。

3 セラピスト間の連携のあり方

今回のケースでは、2人のThが同時期・同時間帯に並行して母子事例を取り扱った。本事例を通しての、Th間の連携のあり方について実感したことを中心に述べる。

西澤（1999）は、虐待によるトラウマを受けた子どもへの心理療法的なアプローチにおいては、環境療法を中心に展開する修正的接近と、プレイセラピーを中心とした回復的接近の2つの方向からのアプローチを組み合わせる必要があると述べて

いる。本事例においては、日常生活を支える非加害親への面接と、子どもにとっては非日常である心理療法を、2人のThによる親子並行面接という枠組みの中で、修正的接近と回復的接近という両面からのアプローチとなるよう試みた。

河合(1986)は親子並行面接におけるTh間のパワーバランスのあり方について、Th相互間に信頼感があるか、もしくはどちらかがチーフの役割をはっきり担い、全体の状況を把握する力があることが重要だと述べている。今回は、同年代で心理臨床経験年数もほぼ同じというTh同士であった。何年も同じ職場で事例を一緒に担当してきた間柄ということもありTh相互間に信頼感があったことが連携をスムーズにさせたと考えている。

また、1人ではなく2人で事例を担当したということで、深刻で重く感じるケースであっても客観視しやすい状況ができたと感じている。Donovanら(1990)は「身体的な侵襲や監禁などといった特定の出来事を同定できないために回避不能なショックを受けたとは考えられないというセラピストは、子どもが経験した世界をまったく理解していないことになる」と述べているが、とくに性的虐待に関しては、社会一般においてこのような子どもが経験した世界への理解が進んでいないと感じる。そのような中で、2人のThが事例に向き合うことで、それぞれが状況によってスーパーバイザー的な役割を果たしたことは、事例理解を深めるにあたって意味深いことだった。

またThの役割および視点の方向性に違いがあることも、連携する際に重要だと感じた。子Thは臨床心理士としてセラピー場面でCIの表現を取り扱うことを中心とし、親Thはセラピーで非加害親の心理的ケアや、子どもの日常を支える環境療法のための心理教育を取り扱うと共に、個と社会をつなげるためのソーシャルワーク的視点を持ちながら関わった。このように、Th同士がセラピーのベースを共有した上で、それぞれ別の専門性を発揮できるという状況は、パズルのピースの動きに似ている。つまり互いが補い合い、結果としてひとつの全体像が浮かび上がることで、事例の本質が捉えやすくなり、セラピーの効果も望める。本研究は、Th間の連携のあり方として、一つのモデルになるのではないかと考えている。

付記

本研究は、興正こども家庭支援センターにおける事例を取り上げました。本論文作成にあたっては社会福祉法人常徳会興正こども家庭支援センターのご理解をいただきましたことを感謝申し上げます。また本研究に関して貴重なコメントを下さったスタッフの皆様にも厚くお礼を申し上げます。そして論文としてまとめることを『同じような思いをした人のために役立てるのならば…』と快諾してくださったお母様と、人生を自ら切り開いていく逞しさをThらに教えてくれたクライアントに、心から感謝申し上げます。

文献

- Braun, B. G. (1988): The Bask (Behavior, Affect, Sensation, Knowledge) Model of Dissociation. *Dissociation*, 1; 4-23.
- Donovan, D. M. & McIntyre, D. (1990): 「HEALING THE HURT CHILD- A Developmental Contextual Approach」(西澤哲訳[2000]:「トラウマをかかえた子どもたち」誠信書房)
- Gil, E. (1991): *The Healing Power of Play. Working with Abused Children*. New York, Guilford Press. (西澤哲訳[1997]:「虐待を受けた子どものプレイセラピー」誠信書房)
- Jones, D. N. (1987): *Understanding child Abuse*. Macmillan Press. (鈴木, 小林, 納谷訳[1995]『児童虐待防止ハンドブック』医学書院)
- Johnson, K. (1989): *Trauma in the Lives of Children*. Alameda, Hunter House.
- Peterson, L. W. & Hardin, M. E. (1997): *CHILDREN IN DISTRESS — A Guide for Screening Children's Art*. (津波古澄子, 安宅勝弘訳[2001]:「危機にある子を見つける 描画スクリーニング法」講談社 33-52.)
- Saunders, B. E. & Meinig, M. (2000): Immediate issues affecting long-team family resolution in cases of parent-child sexual abuse. In Reece, R. M. (ed.): *Treatment of Child Abuse*. Johns Hopkins University Press, Baltimore. (郭麗月監訳[2005]:「虐待された子どもへの治療 — 精神保健, 医療, 法的対応から支援まで」明石書店)
- 安齊順子(2002): 父からの性的虐待を受けた女性への心理面接 心理臨床学研究, 20(3), 221-229.
- 石川瞭子(2008): 性虐待と性暴力のはざままで — 性虐待の未然防止: 石川瞭子編「性虐待の未然防止 — 現場からの報告」現代のエスプリ 496. 至文堂
- 岡田康伸(2003): 「子どもの問題行動と母子の心理

- 療法」松尾恒子編『母と子の心理療法』創元社
- 岡本正子 (2009)：「性的虐待を受けた子どもと家族のケア及び援助枠組みに関する研究」厚生労働科学研究費補助金政策科学総合研究事業（政策科学推進研究業）(<http://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD00.do>) 2012/01/17 閲覧
- 岡本正子, 八木修司(2011)：性的虐待を受けた子どもへのケア・ガイドライン（児童養護施設・情緒障害児短期治療施設版）。（厚生労働科学研究〈政策科学総合研究事業〉）子どもへの性的虐待への予防・対応・ケアに関する研究（研究代表者柳澤正義）平成20・21・22年度総合研究報告書, 253-389.
- 奥山真紀子(1997)：被虐待児の治療とケア 臨床精神医学 26(1), 19-26.
- 河合隼雄 (1986)：「児童の治療における親子並行面接の実際」『心理療法論考所収』新曜社, 218-226.
- 小俣和義(2001)：同一セラピストによる並行母親面接の導入と進め方 心理臨床学研究 19(2)119-131.
- 子どもの虹情報研修センター 「児童相談所における虐待相談の内容別件数の推移」<http://www.crc-japan.net/contents/situation/pdf/10011303.pdf> (2011/11/25 閲覧)
- 小山充道 (2002)：『思いの理論と対話療法』誠信書房 95-180.
- 小山充道(2008)：「自分描画法」『小山充道編著 必携臨床心理アセスメント所収』金剛出版, 374-378.
- 坂井聖二 (1998)：「児童虐待を理解するための基本的な問題点」吉田恒雄編『児童虐待への介入：その制度と法』尚学社
- 杉山登志郎 (2007)：『子ども虐待という第四の発達障害』学研教育出版
- 杉山登志郎(2011)：性的虐待の実態とケア 子どもの虐待とネグレクト 13(2) 子どもの虐待防止学会
- 中釜洋子(2008)：「親面接の進め方」『家族のための心理援助』金剛出版
- 西澤哲 (1994)：「子どもの虐待——子どもと家族への治療的アプローチ」誠信書房
- 西澤哲 (1999)：トラウマの臨床心理学 金剛出版
- 西澤哲(2011)：性的虐待が子どもに及ぼす心理的影響とそのアセスメント 子どもの虐待とネグレクト 13(2) 日本子ども虐待防止学会
- 山本恒雄 (2010)：「日本における性的虐待の実態と対応の現状」子どもの虹情報研修センター紀要, 8, 56-78.